■　肩の力を抜くためには　■

制服の学校はあるものの、多くの学校はプロの楽団よろしく揃いのユニフォームで登場した。舞台に立つ意識が高まり、気持ちが一つになる。７月２９日は第６６回『石川県吹奏楽コンクール』だった。金沢歌劇座の正面には、学校ごとの楽器運搬のトラックがずらりと並ぶ。出入りを含め、１校１５分間で、課題曲と自由曲を演奏する。１年間にわたり練習を積んできた成果はこの１５分に表現しなくてはならない。

本校の吹奏楽部が課題曲５曲から選んだのは、『エレウシスの祭儀』。高校Ａ部門で、この曲を選んだのは本校のみだった。技術的にも音楽的にも難しい曲に感じたが、チャレンジ精神は称賛に値するのではないか。自由曲の『交響曲第２番第３楽章』はエネルギーを感じる演奏だった。仕上がりはよかったと思う。

本番の舞台でいつも思うのは、練習の成果は出せたかどうかということだ。個人の技術があって、パートの演奏がある。各パートが合わさって一つの曲を奏でる。全体のために、各自が負う責任があり、気持ちを一つにして初めて曲が創られる。緊張感の中で、平常心を保つのも簡単なことではない。どの学校も練習を積んできている。曲を理解し、どれだけ情感を乗せられるかが、出来を決めるのだろう。

高校吹奏楽の祭典を堪能し、家に帰ると、ＡＩ(人工知能)搭載のアンドロイドが指揮するオペラが開催されたと、ＴＶのニュースが報じていた。指揮者オルタは顔と手だけが樹脂を覆って人間のようだが、ボディのほとんどが剥き出しのメタルだ。ＡＩが演奏をリードして、オーケストラの潜在能力をどこまで引き出せるかの実験を兼ねているという。

将棋や囲碁は近年、ＡＩによって新しい手が生み出されている。それと同様に、演奏家の能力もＡＩによって引き出されていくのかもしれない。

コンクールの結果は銀賞だった。でも、次につながるような演奏はできたと思う。かつてオーケストラ・アンサンブル金沢(ＯＥＫ)を設立した世界的指揮者の故・岩城宏之さんが「肩の力を抜くためにはまず、あり余る力がなくてはならない」と言っていたのを想い出す。アンドロイドが指揮をする時代が来たとしても、あり余る力をつけるためには、演奏者が日々の鍛錬を積み重ねるしか道はない。また、積み重ねの日々が始まる。次年度への飛躍を期待したい。